

平郡王記室時期の方觀承について

黨 武 彦

A study on Fang Guancheng in the period of Prince Ping's secretary

Takehiko To

(Received September 30, 2022)

はじめに

清代乾隆前半期の行政官僚である方觀承（1698-1768）の事跡については、すでに舊稿において乾隆元年以降の事蹟を明らかにし^{*1}、前稿においては任官以前について、その生誕から雍正六（1728）年までの足蹟を明らかにした。^{*2}本稿は、その間であるおよそ七年を埋めるべく、『述本堂詩集』所収の『松漠草』（詩集題の割註に「自軍中往返京師有作附後」とある）を素材に、雍正十一年に定邊大將軍に任ぜられた平郡王福彭の記室として布衣より任官し、ジュンガル遠征に従軍した前後の時期の方觀承の足取りを追い、彼の生涯を一貫して描くための作業を行うものである。なお原文中の〔 〕内は筆者の注記である。

1. 雍正十（1732）年 平郡王の記室となる

まず『松漠草』の序の全文より、平郡王福彭との交流の始まりから、ジュンガル遠征に従軍し、この詩集を編むまでの過程をみていく。

まず導入として以下のように述べる。「京師より東北のかた行くこと五千里にして遥かにト魁塞〔チチハル〕に抵る。古の黒水部なり。余、敝車羸馬を以て、囊糧齒雪し、其の間は二十年に垂んとし甫めて息足す。又た京師より西北のかた八千里を行き、而して遥かに阿爾泰〔アルタイ〕山に抵る。古の金微、今の準夷の界なり。余、鞬弭弓矢にして勞を知らず、磨楯草檄にして其の懦を忘れ、儼然として國の爲に宣力の身、復た曩時の羈旅の狀に非ず、亦た自ら其の踪跡の可を託す」ここまでは、雍正十年までの黒龍江との往返、雍正十一年の従軍によりアルタイ山脈に至ったことを記述する。改めて方觀承の移動範囲が廣範であることがわかる。

次に、平郡王福彭に知遇を得る過程について述べる。「是より先、京師に寓する時、平郡王賓客を好み、

屢々召されるも未だ赴かず。雍正壬子〔十年〕の秋、道奉天を經る時、王に山陵の役有り^{*3}、乃ち始めて王に行館中に謁し、王、方に作書するに、命じて巨幅を書かしむも、未竟にして忽ち筆を擲して眩瞽す。王、余の羸疾を知り、案前に蒔てたる人蓆一本、輒ち親しく之を勵り、從者を趣して煎じて以て余に飲ましめること十指泥汗にして惜ま弗るなり。余の心、焉に感じ、是より京師に至り數々進見す」福彭の京師の王府は、内城宣武門近くにある。^{*4}方觀承が平郡王福彭に見出された経緯についてはいくつかの筆記史料において描かれている。袁枚撰の神道碑には、「雍正壬子、入京師、有族人謀薦入平郡王藩邸、王與語大奇之、情好日隆」^{*5}と族人に推薦された、とあり、『清稗類鈔』『方觀承一生知遇』には、「〔方觀承〕赴都、至東華門、以測字資旅食、適平郡王輿過、見招帖、善之、呼問、知爲方書、延歸、掌記室、備蒙禮遇」と京師において測字をしているときにたまたま通りかかった平郡王に遭遇した、というような、いくつかのヴァリエーションがあるが、自らが乾隆十八年前後に記したこの序文の経緯がより實像に近いものであろう。

次に定邊大將軍に任ぜられた福彭の記室となり、任官する過程を描く。「王一日余に謂いて曰く『吾家、三世大將軍爲り。今、西事未だ畢らず、吾、若し行くこと有れば、子、其の偕にせんか』と。余慨然として曰く『古に長纓の請有らば、草莽の臣に志無きに非らざるなり』と。居ること何く無くして、王果して定邊大將軍の命を拜し、師を北路に統べるに、前諾を責め布衣を以て從うを願ひ、王、之を許せり。繼て復た之を相國鄂公に言うに、軍府書記に私往する者無きを以て、乃ち余の名を上り、世宗憲皇帝の先世を嗟歎を垂詢するを蒙り、之より久しくして内閣中書舎人以行を授く。於戲、過越の恩、不世の遇なり」方觀承による福彭との會話の復元は、そのお互いの信賴關係を表現するものである。任官の詳細は次章で『松漠草』1および2の詩をみるときに述べる。康熙二十七年（1688）年、ジュンガル部長ガ

ルダンはハルハ部に侵入し、清との以降約七十年間にわたる対立が始まる。ガルダンの甥ツェワンラブタンの子ガルダンツェリンは、康熙五（1727）年に部長の位を継いだ。^{*6}ガルダンツェリンは、清との対立を深め、雍正九年に漠北のモンゴル高原に侵入し、雍正十一年までホヴドや天山東部で一進一退の攻防を繰り返した。福彭はこの過程における終盤に当たる雍正十一年七月初九日定邊大將軍に任命された。

最後に実際の從軍の過程、および『松漠草』成立の事情を述べる。「大隊と偕に癸丑〔雍正十一年〕八月を以て戒途し、十一月軍門に至り、明年六月阿爾泰山の南に進屯し、十月烏良蘇泰〔ウリヤスタイ〕大營に回る。又明年冬、台米爾に撤兵し、王に従いて還朝する。是の行たるや、師に震驚簡書の暇無く、詩三百餘首を得る、並びに王の作す所を録すに百篇に近きも、移帳するや倉卒にして野水大漲して駝の陷するに値り、筒の背より顛じ、盡く之を失う。塞外山川百韻及び諸長篇、復記すべからずして緝拾する所の者僅に三之一のみ、或は宜しく補作すべきを謂うも、余以うに過時にして之を溯言するは是れ強言なり。強言は詩に非らざるなり。于耐圃學士以て然りと爲す。爰に以て存する所の若干首、叙して之を録すること左のごとし」從軍中に本來三百首以上あった詩を失ってしまったが、その時の心情に溯っての作詩は「強言」であって詩ではない、という表明は興味深い。于耐圃學士は于敏中（1714-1779）、乾隆二年丁巳二年恩科の狀元、『燕行集』上3「于耐圃侍講將按試衢州枉過論詩竟夕」（乾隆十三年）にも登場する。乾隆十三年には「侍講」と稱されており、「學士」と稱されたこの序文は、乾隆十六年の侍講學士任官以降、乾隆十九年の内閣學士から兵部右侍郎への昇任以前に書かれたものであり、この序文が詩集自体の編纂時期に改めて記述されたものであることは明らかである。

2. 雍正十一（1733）年 任官と從軍

1. 「上平郡王新拜定邊大將軍統師北路」平郡王^{*7}の爵位を嗣いでいた福彭^{*8}（1708-1749）は雍正十一年七月初九日に定邊大將軍に任ぜられた。^{*9}第十九句目の割註に、「王曾祖以下三世大將軍」とあり、最終句の割註に「大將軍費揚古討平準噶爾歸化城立祠祀之。歸化城本名枯枯和屯譯曰青城爲北征孔道」とあるが、費揚古（フィヤング 1645-1701）は滿洲正白旗の武將。ガルダンがハルハに侵入したときに撃破し、康熙三十四年に撫遠大將軍となる）滿洲正白旗の重臣で建州女直王家のドンゴ氏の出身。順治

帝の寵妃の弟で、父の伯爵を継ぎ、ガルダン討伐時には撫遠大將軍に任じられて西路軍を率い、ジョン・モドの戦で清軍に勝利をもたらした。^{*10}ジョン・モドの戦いは1696年6月12日で、「ガルダンの妃アヌ・ハトンは戦死し、ガルダン軍の主力は壊滅した。ガルダン自身は少數の部下とともに脱出したが、もはや二度とこの痛手から立ち直れなくなった。すべては撫遠大將軍フィヤングの西路軍が、ゴビ砂漠横斷の絶大な困苦に耐えて、予定通りにトウラ河に達したおかげであった」^{*11}。トウラ河は現ウランバートル附近を流れる河川。

2. 「癸丑七月承以布衣蒙恩投内閣中書舍人隨征北路感賦四韻」五言律詩一首。方觀承の最大の轉機となった布衣からの任官である。^{*12}『松漠草』序文によれば、福彭は当初は布衣のままに書記とする豫定であったようであるが、福彭が軍機大臣・保和殿大學士の鄂爾泰にそのことを言うと「軍府の書記に私往する者無し」という理由で雍正帝に方觀承の名を伝え、雍正帝からは祖父や父の苦難を垂詢された。^{*13}當時滿洲人官僚の頂點にあった鄂爾泰の知るところとなったことも、その後乾隆二年に軍機章京となったことと関連を持つかもしれない。三句目の「薇香聯四世」の割註には「先曾祖觀察公、先王父水部公、皆筮仕中書、先君釋褐後、亦詮次中書」とあり、「薇香」という詩句が「薇垣」が中書省を表すことから、内閣中書を示すものであることがわかる。^{*14}袁枚の神道碑においては、記室となった時には「中書銜」を賜ったとし、雍正十三年（袁枚は十二年とする）に凱旋後に軍功をもって實授された^{*15}、とし、更に『國史列傳』においては「由監生加中書銜」とする。

3. 「從征定邊大將軍王掌書記與諸兄弟敘別書情四首」七言律詩四首。『松漠草』序文によれば大隊とともに出發したのは、八月で、4の詩題に「中秋」とあることからみてからみて十五日より以前である。第一首最終句の割註に「相國西材鄂公經畧西北兩路軍事」とあるのは、雍正十年七月十三日に、前年の七月に雲貴總督の任地より召京され、この年の正月に保和殿大學士に陞任していた鄂爾泰が「督巡陝甘經畧一應軍務」を命じられ^{*16}、翌十一年正月十八日に「前往北路軍營經畧軍務」を命じられた^{*17}ことを指す。第二首末割註に「杜詩高帝子孫盡隆準」とあるのは、杜甫の「哀王孫」の十三句目であり「しかしさすがに皇帝の子孫はみな高い鼻筋が通り」^{*18}の意。第二首第二句の「重勞隆準出畿寰」に對應するものである。第三首第六句目の割註に「大兄南歸」とあり、第四首第二句の割註に「大兄與定思弟歸江寧、庭策兄歸桐城」とあり、兄方觀永と定

思すなわち方道章^{*19}は江寧に歸り、第三句の割註に「益思弟游南陽」とあり、第四句の割註に「瑾懷弟隨陶鏡園太守赴滇中」とあり、第七句の割註に「高説・高逢・惟端・綺亭諸兄弟皆待選京師」とあり、詩題にあるように、從軍にあたり、一族の兄弟に対して離別の詩を詠んだものである。

4. 「居庸關中秋同大兄作並寄諸兄弟」七言律詩。詩題から見て、方觀承は延慶州の居庸關まで同道していたことが推察され、その後、前詩にあるように南歸したのであろう。

5. 「過岔道鎮讀延慶州牧郭勁草去思碑」七言律詩。岔道鎮は八達嶺を越えたところに在る。詩題中の「延慶州牧郭勁草去思碑」については、光緒『延慶州志』卷六職官に「郭浩字善夫。閩人。性寬厚純雅，牧州一載，惠政實多，維風正俗，而民化之。解組去，士民攀留不得，乃樹去思碑，於州南之岔道城」とあるように、康熙年間の知州であった福建出身の郭浩が惠政により離任に當り士民が去思碑を樹てたことが記述されている。^{*20}二句目「大字丹題治績垂」の割註に、「碑用朱書，示異他碑也」とあり、他の碑文とは異なり朱字であったことを記す。

6. 「招華」五言古詩。長文の詩題割註によれば、張家口外三百里に在り、周圍十里の城を有する。同じく割註に「蓋元靜安路集寧縣地」とあり、現在の内モンゴル自治区ウランチャブ市の集寧區が當るのではないと思われる。當時は正黃旗察哈爾に屬していた。

7. 「歸化城」七言律詩二首。歸化城は現在の呼和浩特（フヘホト、ココ・ホトン）^{*21}。最終句割註に「歸化地暖，九月猶雷雨，草有青者」その氣候の特色を述べる。

8. 「歸化城拜大將軍費襄壯公祠堂」五言詩。費襄壯公は1で既出の費揚古（フィヤング）。詩の冒頭三句「一戰收邊日，先皇駐駕初，御衣親賜著」とあり、康熙帝が康熙三十五年の所謂第二次ジュンガル遠征に際し、十月十三日から二十四日に至る間、歸化城に駐蹕しており^{*22}、その時のことを指すか。咸豐『歸綏識略』卷九、地部、壇廟に「費公祠在財神廟西。康熙中商民爲撫遠大將軍費襄壯公建立生祠。公沒即塑像以祀」とある。

9. 「青冢」七言絶句。「青冢」は漢の王昭君の墓地。杜甫「詠懷古蹟五首 其三」の四句目に「獨留青冢向黄昏」とあり、仇兆鰲の註に「『歸州圖經』邊地多白草，昭君冢獨青」とある。^{*23}

10. 「大青山」七言絶句。詩題の割註に「歸化北三十里，寒暖廻異」とある。ここを境に氣候が一轉するのであろう。民國『歸綏縣志』輿地志に「在城北三十里，一曰大斤山，或曰秦山，曰青山，其實即

陰山也」とある。

11. 「鼠蒿歌」詩題の割註に「駐置吞」と「置吞者寒也。地高寒故名」という記述があるが、フヘホトからウリヤスタイ間ではあるが、具體的にどの地に當るか不明。鼠が蒿（ヨモギが原義であるが、広く野草も指す語）を巢穴に堆積しているのを採集して燥薪として千人の炊に供している、とする。鼠は本詩割註の「侏儻里衍」また別詩割註の「侏馬里罕」^{*24}と呼ばれているようであるが詳細は不明。地中に巢を作るという生態、本詩割註に「足前短後長性惡」とあり、また別詩割註に「後股偏長前爪甚利」^{*25}とある特徴から、シベリアマーモット（學名 *Marmota sibirica*、モンゴル語でタルバガン）である可能性がある。

12. 「暮」五言律詩。三句目の割註に「余取道軍臺，臺今廢」とあるが、軍臺は西北兩路に設けられた郵驛で、文書軍報の通送に使われた。この時期の講和により、一時廢されたと考えられる。^{*26}後出の37「從軍雜記一百首」七首目の割註に「自張家口至烏里雅蘇泰軍營，凡四十七臺十六腰站，出口九十里至大壩，爲第一臺壩，即嶺也」とあり、ウリヤスタイの軍營まで四十七の臺と十六の腰站があったことがわかる。

13. 「雪」五言詩。14. 「煮雪」五言律詩。は雪の描写。後者の詩題や第一句「雪供炊代水」から、雪を行軍の水補給に充てていたことがわかる。

15. 「鄯踏歩」七言律詩。ここでの鄯の義は地名であることが推察できるが不詳。^{*27}詩題の割註に「兩山夾峙，中豆黃沙曲曲平衍，宛若河身不知所極」という自然描寫、七句目・八句目の「百戰匈奴迷失道，令人悲憶李將軍」という敘述から、匈奴の故地である「塔米爾」（現ツェツェルレグ附近）からウリヤスタイに至るハンガイ山脈のことであろう。6・11・15にいくつかの比定できない地名があるが、後攷に俟つ。

16. 「十一月三十日夜抵軍門」五言律詩。八月の出發から四箇月程度でウリヤスタイ軍營に到着している。37「從軍雜記一百首」四十七首目の割註に「自京師至軍營計六千里，郵筒八日可達，草青馬壯纔須七日」とある。軍報などの情報の傳達速度は、一日でおおよそ400kmであり、かなりの速さである。

17. 「寄懷大兄歸金陵」五言律詩、18「寄憶三弟」七言律詩はそれぞれ、方觀承と方觀本を懷憶したものの。

19. 「傳上公惠几賦謝」五言律詩。「傳上公」は傅爾丹（フルダン）か。フルダンは瓜爾佳氏で、滿洲鑲黃旗人。三等公兼佐領を襲爵。康熙末年にアルタイに駐屯し武功を擧げていた。雍正七年二月、雍正

帝がジューンガル遠征を廷臣に協議させた際、多くの廷臣が非戦を主張する中で張廷玉の用兵論が採用され、^{*28} 三月に領侍衛内大臣フルダンを靖邊大將軍に任じて北路を統帥させた。^{*29} 雍正九年六月のガルダンツェリンのイリ方面からホブトへの清軍に當り、五月からホブトに築城して駐屯していたフルダンは偽計に陥りアルタイ山脈の博克托嶺に進軍し五分の四の人員を失う大敗を喫し、^{*30} 十一月十二日に北路の振武將軍に降格される。翌十年七月の烏孫珠勒においても敗戦し、九月二十五日に領侍衛内大臣および振武將軍を解任され、公爵位も剝奪される。十一年にも弾劾されるが雍正帝はその罪を許し、軍に留めた。よって、この詩が詠まれた雍正十一年十二月の時點でフルダンがウリヤスタイに滞在している可能性は十分にある。「几賦」は『西京雜記』に典據を持つ語かもしれないが、不詳。

20. 「月中野望」七言律詩。21. 「癸丑除夕」七言律詩。十二月半ばから末にかけての野營時の感懷を詠ずる。

3. 雍正十二（1734）年 ウリヤスタイ軍營にて

22. 「甲寅元旦」七言律詩。詩題の割註に「朔日戊寅立春、三辰皆寅歲德勝於東方爲兵占佳兆」とあり、この年の正月元旦はグレゴリオ暦2月4日で、年と正月朔日と立春に寅が揃うことを吉兆であるとしている。

23. 「友人寓屋懸紗燈屬作詩」五言律詩。「友人」が誰なのか特定できない。31にも後出。

24. 「雪」五言律詩。25. 「待雁」五言律詩。26. 「望遠」五言律詩。27. 「五日」七言詩。以上は春から初夏にかけて、主に軍門すなわちウリヤスタイ附近の自然情形を詠んだもの。

28. 「金蓮花」七言絶句。詩題割註の「高尺許、五月開花、如黃薇而色深層、瓣五」という記述から學名 *Trollius chinensis Bunge* であろう。「西北塞至準夷境内皆有之」とする。29. 「芍薬」七言絶句。詩題の割註に「花層瓣香色畧如中土」とし、學名 *Paeonia lactiflora* のいわゆるシャクヤクであろう。30. 「媚蝶花」七言絶句。詩題の割註に「馬蘭瓣」あるいは「簷蔔」のごととして詳細な説明があるが、學名を比定するに至らない。「其の形の蝶に似て分合して媚有り」により、平郡王邸において命名された、とする。

31. 「示友人」七言律詩。「友人」は23と同一人物であるか不明。第七句と最終句「聞道秦中諸父老、十行詔下淚潺湲」とあり、その割註に「辛亥歲〔雍正九年〕、宣諭陝甘吏部學習同邑左鵬使、歸爲言如此

とあるが、雍正九年三月二十日の上諭に「諭内閣。朕欲於在京官員内、揀選老成明白者數十員、命往陝西内地州縣、辦理宣諭化導之事。著大學士會同該教習、於庶吉士内揀選數員、各部堂官、在本部學習人員内、揀選一二十員、國子監祭酒等、在選拔貢生内揀選二三十員、俱交送内閣、帶領引見」^{*31}とあり、翰林院の庶吉士、六部の學習中の者、國子監の拔貢生などの各部門のキャリアが浅い者を陝西に派遣し、宣諭化導に従事させることを命じた。この背景には、ジューンガル遠征における軍の路程にあり、兵站の要所でもある陝西・甘肅地方において、民間に負擔を與えないために雍正九年の甘肅の錢糧の全部を蠲免、西安所屬については合計八十万兩（六割の減免）の蠲免をおこなうことを命じそれを刊刻して頒布することも命ぜられた。^{*32} 詩本體は、この頒布された上諭を讀んだ陝西省の父老が流涕していることを表現し、割註は宣諭の任務に當たった吏部學習で同邑出身の左鵬使がその事實を語っていたことを示す。左鵬使については不詳。また、雍正十年閏五月初六日の『實錄』の記事の「議敘陝西宣諭化導官員、右春坊右贊善錢陳羣等五十一人、分別陞轉有差」^{*33}という記述から、最低でも總員五十一名で宣諭に當っていたことがわかる。

32. 「寄懷瀋陽康東侯」五言詩。康東侯は同世代の詩人として著名な戴亨^{*34}（1691-?）の詩に「艾掄元招康東侯葉聖嘉魏文壁艾明德車宜年詩集余遠歸聞赴同用雄字」（『慶芝堂詩集』卷十三）、「送康東侯門人高宏同赴鄉試」（『慶芝堂詩集』卷十三）があり、その詩題中に登場する。

33. 「寄懷瀋陽艾大倫元」七言律詩。艾大倫元は初出であるが前出の戴亨の詩題に「艾掄元」として登場する。本詩題の割註に「綸元爲筆帖式屬三陵佐領」とあり、盛京三陵のニルに屬するニルイエジェンであった。二句目の割註に「壬子別於通州」とあり、雍正十年に方觀承とともに通州に在ったことがわかる。

34. 「七夕」雍正十二年の七夕はグレゴリオ暦8月5日。詩題の割註に「時駐夸舒魯圖傍科布多河源大風盡夜」とあり、35. 「氈廬」七言律詩。詩題の割註に「時駐科布多河源」とあり、この時期にはホブト河の河源に駐在している。

36. 「寄懷葉聖嘉」七言絶句二首。葉聖嘉は32に既出の戴亨の別の詩に「艾明德葉聖嘉蔡宗魯魏文壁與余皆庚午〔康熙29（1690）〕年生交最善十年來相繼物故歸而哭之、又隨征雁上長安月照離筵慘不歡滿眼窮愁悲骨肉空囊冰雪走饑寒炎涼作客肌膚慣天地無家去住難八口關心聊復爾松楸回首淚闌干既痛逝者且自念也」（『慶芝堂詩集』卷十四）という詩題の七言

律詩があり、その四句目の割註に「聖嘉精醫没後有母年七十餘」とあり、「醉歌行贈葉聖嘉醫士〔割註〕甲辰〔雍正二年〕遼東作」（『慶芝堂詩集〕卷七）という七言古詩の詩題には醫士と明記されており、醫師であったことがわかる。

37. 「從軍雜紀一百首」七言前句一百首。『小方壺齋輿地叢鈔』に所収の『從軍雜記』が從來知られているが、その出典となるもの。^{*35}つまり『從軍雜記』は、光緒十七（1891）年刊の『小方壺齋輿地叢鈔』を出版する際に、輯者の王錫祺がこの「從軍雜紀一百首」を元に編集したものとなる。校勘すると、『從軍雜記』は「從軍雜紀一百首」の割註の部分抜粋したものとなっており、それに若干の補綴削除を行っている。例えば、6「招華」の割註が出發後の歸化城附近の記述に挿入されている。全體は雍正十一年の出發から、雍正十三年七月の撤兵、十一月の還京までの記述であり、詳しくは別稿にて検討する予定である。

4. 雍正十三（1735）年 雍正帝の崩御と歸還

38. 「大行皇帝晚詞四首」五言絶句四首。雍正帝は雍正十三年八月二十三日（グレゴリオ暦10月8日）に崩御した。康熙帝の崩御の際には詩作はみられないが、恩を受けた雍正帝には晩詞を詠んで追悼した。平郡王福彭は九月初十日の上諭で「聞皇考大事，必奏請叩謁梓宮」により、慶復に命じて定邊大將軍の任の交替を命じられる。^{*36}十一月には福彭の軍功の議叙が命じられた。^{*37}

39. 「次土木驛見郭勁使君過延慶感部民樹石與題壁之作即次原韻奉懷」七言律詩。從軍復路の土木驛において郭浩に會い、郭浩が雍正七年に延慶州の民が樹てた石碑に感じて詠んだ「軍都關外黯魂銷，騰有桓碑伴次寥，自是邊隅□□古，豈眞長吏果堪謡，彈琴峽在琴應碎，應夢山空夢欲飄，景物恍然如昨日，幾固翹首朔雲高」という詩に次韻して詠んだもの。最終句の韻字を方觀承は「遥」としている。5を参照されたし。

40. 「爲舍弟瑾懷作」五言詩，41. 「又」五言詩，の舍弟瑾懷は、3「從征定邊大將軍王掌書記與諸兄弟敘別書情四首」において第四首第四句の割註に「瑾懷弟隨陶鏡園太守赴滇中」とある「瑾懷弟」であろうが、詳細は不明。40の二句目に「滇南萬里征」とあり、引き續きおそらく雲南で幕友に任じているのであろう。

42. 「麓菴上人主席平山因薦赴京養疾夕照寺數月矣時余至自軍中將復他往前一日晤郭勁草知之同車往訪留連盡暮蓋與師別七年而離合又并此一日焉歸途詩

以誌感遂得四韻三首」七言律詩三首。麓菴上人は、『宜田彙稿』74・80の雍正五年五月の詩に登場の際には武昌の人か、との推定のみであったが、「主席平山」とあり、平山縣（直隸省正定府）で寺院を主持していたこと、この年京師の夕照寺（外城の廣渠門附近）^{*38}に療養で訪れていたことがわかる。方觀承は郭勁草（郭浩）からその情報を聞き、ともに訪問したようである。二首目の二句目の割註に「師赴京時迂道謁孔林」とあり、京師に到る前に平山から山東の曲阜を經過している。また、五句目の割註に「弟子龔某衣冠從學」とあるが、龔某が誰であるのか特定は困難である。

43. 「綺亭弟赴龍南任即扶二親柩反葬桐城詩以憶之二首」七言律詩二首。綺亭弟は方求義のこと。方求義は雍正十三年江西省の龍南縣知縣となっている。^{*39}

44. 「題王甘泉侍御畫卷」詩題の割註に「甘泉二十年前與同學十二人分詠花果因繪所詠爲一圖各手錄其詩於後者十人告歸者三未仕者二人原敘云云」とある。王甘泉は王玠か。江蘇鎮洋の人で康熙甲午（五十三年）舉人。^{*40}

45「寄懷石東村盤山二首」七言律詩二首。石東村は英和（滿洲正白旗人で乾隆五十八年進士）の祖父である明憲（方觀承と布衣の交流を有していた）の次兄に當り、『豎歩吟』38にも登場する。英和『恩福堂筆記』卷上に「二伯祖東村公，雍正年間舉孝廉方正，而徵不應」とある。

46. 「麓菴師卒於京邸師於余爲物外交而情契深至余得以世法哭之聲長詞遂積四首並寄暉公霞公兩師各一紙」七言律詩四首。42で登場した麓菴師の逝去を悼むもの。「余の物外の交を爲すにおいて情契深至なり」という表現は方觀承の佛僧との交流の心性の一端を表現するものであろう。第二首の二句目の割註に「師舊爲清涼上侍，常暝坐，擊幽冥鐘，則謝不面客，惟余不例」とあり、五句目の割註に「余每至寺，輒盡日，師常歡送余歸路」とあり、麓菴師と方觀承は江寧の清涼山寺において親密な交流があったことがわかる。清涼山寺は方觀承が困窮したときに身を寄せた寺院である。^{*41}最終句の割註に「戊申〔雍正六年〕師僕被同舟至寶應大雪始返」とあるが、くしくも江蘇省淮安府寶應縣は、肉屋との交流の逸話（この時のものかは不詳）のある處である。^{*42}第三首の三句目の割註に「師在平山曾十寄書約余南歸」とあり、いずれ江寧に歸ることを約束していたのであろうか。六句目の割註に「師歿時年纔三十八」とあり、享年三十八、方觀承もこの年三十八歳（滿37歳）。最終句の割註に「清涼寺災，尊師中公構復之，師用力居多」とあり、清涼寺に災害が起こったよう

だが詳細は不明。第四首の四句目の割註に、「師以文覺禪師召至即閉關，夕照寺禪師甚相推重，不以弟子畜之，曼珠爲世尊友，故以爲喩」とあり，最終句の割註に「暉靈・霞外兩師，並中洲大師高弟，與麓公爲一堂法眷者」とあり，詩題に登場する暉公霞公が暉靈・霞外兩師であり，麓菴師とともに方觀承を奇として優遇した清涼寺の中洲大師^{*43}の一門であることがわかる。

47. 「焚詩歌爲石東村作」七言古風。五句目の割註に「陳石閭景元橋洲景忠」とあり，六句目の割註に「黃松石穀」とあり，八句目の割註にある「李眉山錯」は李錯（1686-1755）。字は鐵君，漢軍正黃旗旗人。祖は副都統，父は湖廣總督，本人は大學士索額圖の娘を娶った。貴顯の出身であるが，官途に拘ることなく，官庫筆帖式に任官したのみで，博學鴻詞にも推薦されたが，受験しなかった。少きより雅にして山水を好み，天下を遍歴した。盤山に居を置き，閉戸耽吟し，その詩は杜甫に比すべく，また孟郊に愧じないと評價された。なお李錯にはこの47と同題の詩がある。

48. 「題吳翼堂太史靜觀圖」五言詩。詩題中の吳翼堂太史は吳華孫（生没年不詳）。安徽省歙縣の人。雍正八年庚戌科二甲二名進士。散館後編修，福建學政等に任じている。^{*44}

おわりに

方觀承のキャリアにおいて，雍正十一年七月に内閣中書舍人を恩授されたことが畫期的なものであったことはいままでのまではないが，その前提として雍正十年秋の奉天での平郡王福彭との邂逅があったことが非常に大きな意味を持つ。福彭はそれ以前から京師において活動する方觀承のことを知っていたのは確かである。おそらくは前稿で明らかにし，本稿でもその一端がみえる旗人との交流が背景にあることが推測できる。また，本稿でも禪僧との「物外の交」の痕跡も確認できた。^{*45}

雍正帝の崩御の約一年後，乾隆元年九月二十八日に舉行された博學鴻詞科に詹事府詹事管少詹事王奕清^{*46}の推薦を得るが，福彭が監試であったのを嫌い，病と称して受験しなかったという。^{*47}その後福彭は乾隆帝の皇族が政治に関わることを避ける方針により政治の表舞台からは消えた。^{*48}一方，方觀承は乾隆元年に軍機處章京となり，樞機に関わる實務家としてのコースにおいて昇任を重ねていくこととなる。

本稿において，雍正十年から十三年の事蹟を明らかにすることができたが，前稿は雍正六年までで

あったので，およそ三年の空白の時期がある。史料の制約から相當に困難ではあるが，今後の課題としたい。

註

- *1 拙稿「方觀承とその時代—乾隆期における一知識人官僚の生涯—」『東洋文化研究』7, 2005. 同「方觀承撰『燕香集』について—詩を史料とした乾隆期政治史の再構成—」『熊本大學教育學部紀要』57, 2008. 同「方觀承撰『燕香集』上について—詩を史料とした乾隆期政治史の再構成（その2）—」『熊本大學教育學部紀要』58, 2009. 同「方觀承撰『燕香集』下について（上）」『熊本大學教育學部紀要』60, 2011. 同「方觀承撰『燕香集』下について（中）」『熊本大學教育學部紀要』63, 2014. 同「方觀承撰『燕香集』下について（下）」『熊本大學教育學部紀要』64, 2015. 同「方觀承撰『燕香二集』上について（上）」『熊本大學教育學部紀要』65, 2016. 同「方觀承撰『燕香二集』上について（下）」『熊本大學教育學部紀要』66, 2017. 同「方觀承撰『燕香二集』下について（上）」『熊本大學教育學部紀要』67, 2018. 同「方觀承撰『燕香二集』下について（下）」『熊本大學教育學部紀要』68, 2019.
- *2 拙稿「任官以前の方觀承について」『熊本大學教育學部紀要』70, 2021.
- *3 『世宗實錄』卷一百十三，雍正九年十二月庚戌，に「平郡王福彭疏報，修理陵工告竣。得旨，平郡王福彭，督率官員等，修理永陵護隄，福陵水法石工，潔誠襄事，敬謹竣工，甚屬可嘉。在事人員，著分別議敘」とあるのがこの「山陵之役」に内容的には相當であるが，「壬子」（雍正十年）「秋」という時期に當らない。なお寶親王時の弘曆の『樂善堂全集定本』卷七に「送平郡王奉命往盛京修理福陵前河道序」という文章がある。
- *4 『嘯亭續錄』卷四，「京師王府第」に「克勤郡王府在石駙馬大街」とある。また，『乾隆京城全圖』にも郡王府があり，大殿五間，東西配樓五間，後殿三間，後寢五間，後罩正屋七間の規模である。趙志忠『北京的王府與文化』北京燕山出版社，1998，參照。
- *5 李富孫『鶴徵後錄』「從謫戍到顯貴」はこれを引く。
- *6 清とジューンガルの抗争については，宮脇淳子『最後の遊牧帝國—ジューンガル部の興亡』講談社，1995，李秀梅『清朝統一準噶爾史實研究—以高層決策爲中心』民族出版社，2007，小沼孝博『清と中央アジア草原—遊牧民の世界から帝國の邊境へ』東京大學出版會，2014，を參照。本稿の時期と重なる雍正期から乾隆初期の講和の交渉過程の最新の成果は澁谷浩一「18世紀前半の清とジューンガルの講和交渉再論—交渉の形式と清側の交渉姿勢を中心に—」『人文コミュニケーション學論集』7, 2021. ただこれらの研究において平郡王福彭への言及はない。福彭の關連文書としては，『雍正朝漢文硃批奏摺』に以下のものがある。當然，方觀承の主稿であることが想定される。なお『雍正硃批諭旨』には福彭の奏

- 摺は含まれていない。
- (1) 雍正十一年十月二十日 5件
 - (2) 雍正十一年十二月十三日 4件
 - (3) 雍正十二年二月十三日 1件 附件硃批2通
 - (4) 雍正十二年三月二十一日 1件
 - (5) 雍正十二年四月二十二日 1件
 - (6) 雍正十二年五月初四日 1件
 - (7) 雍正十二年六月十五日 5件
 - (8) 雍正十二年七月十二日 2件
 - (9) 雍正十二年八月二十五日 1件
 - (10) 雍正十三年三月初七日 1件
 - (11) 雍正十三年四月初八日 1件 また、中國第一歴史檔案館編『雍正朝滿文硃批奏摺全譯』（黄山書社、1998）には、福彭の奏摺24件が収録されている。
- *7 太祖の孫である岳托（1599-1639）が封じられた多羅克勤郡王は、清初以來の八鐵帽子王の一つであり、岳托の孫羅科鐸（1640-1682）の代から平郡王と改稱していた。のち乾隆十五年に克勤郡王に名稱が戻される。
- *8 『列祖子孫』直格檔玉牒備查本第三本を典據とする「鑲紅旗第五族訥爾蘇諸子生簡歷」（故宮博物院明清檔案部編『關於江寧織造曹家檔案史料』中華書局、1975、所收）、に「康熙四十七年戊子六月二十六日卯時、嫡福晉曹佳氏・通政使曹寅之女所出。雍正四年七月、襲封多羅平郡王。雍正十年正月、管理鑲藍旗滿洲都統事務；本年閏五月、授宗人府右宗正。十一年二月充玉牒館總裁；本年四月、軍機處行走；八月、授定邊大將軍。十三年十一月、協辦總理事務。乾隆元年三月、管理正白旗滿洲都統事務。二年三月、修理盛京三陵；本年閏九月、兼管滿洲火器營事務；本年十月、調管正黃旗滿洲都統事務。三年七月、擢任議政。乾隆十三年戊辰十一月十三日午時薨、年四十一歲、諡曰「敏」。嫡福晉費莫氏、總督郭璉之女；繼福晉馬佳氏、中書關保之女；側福晉赫舍里氏、員外郎蘇赫臣之女、側福晉瓜爾佳氏、六品管領米蘭泰之女；庶福晉羅氏、羅乾之女；庶福晉李佳氏、六品管領李汝輝之女；庶福晉王佳氏八品司匠全保之女」とする。第六代の平郡王。ナルスの長子。母は曹雪芹の祖父である曹寅の娘である。吳新雷「關於曹雪芹世的新資料—『康熙上元縣志・曹璽傳』的發現及探究」『曹雪芹江南家世叢考』龍視界、2015に、江寧（南京）の丹鳳街「紹德堂」遺址について、方觀承がのちに直隸清河道となった時に購入したものだとするが、誰から購入したのかははっきりとはしないとほしつ、福彭と方觀承の關係から曹家から購入したのではないかという推測をしている。
- *9 『世宗實錄』卷一百三十三、雍正十一年七月戊子。後出37「從軍雜記一百首」第一首第三句に「御賜謙公勤勇字」とあり、最終句割註に「雍正十一年六月、命平郡王爲定邊大將軍、統帥北路、進勦準噶爾。上親授勅印朱筆書四字佩之」とある。
- *10 岡田英弘『大清帝國隆盛期の實象—第四代康熙帝の手紙から 1661-1722』藤原書店、2013。p.107。
- *11 同、pp.164-165。
- *12 趙慎畛『榆巢雜識』下卷「方觀承」に「我朝以書記起用至大員者、惟桐城方恪敏」とある。趙慎畛は道光五年没。
- *13 『清稗類鈔』知遇類「方觀承一生知遇」には「〔平郡王〕藩邸楹帖盡出方手、世宗臨幸見之、詢何人筆、王以方對、即召見、賞中書、從此受知」と、異なる狀況を描く。
- *14 『郎潛紀聞二筆』卷四「薇垣五名士」は、内閣中書舍人の異才をもって「薇垣五名士」としている。なお、五名士には龔自珍、魏源が名を連ねている。
- *15 袁枚「太子太保直隸總督方恪敏公觀承神道碑」『小倉山房文集』卷三。
- *16 『世宗實錄』卷一百二十一、雍正十年七月丁酉。
- *17 『世宗實錄』卷一百二十七、雍正十一年正月庚子。
- *18 下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩譯註（一）』講談社學術文庫、2016、（譯註執筆：太田亨）。
- *19 方章道は方苞の子。雍正十年舉人。『豎步吟』26にその名がみえる。
- *20 光緒『延慶州志』卷十、碑碣「國朝州牧郭公去思碑」に「郭浩、己酉（雍正七年）七月、復至延慶、見岔道東門外、州人所立石碑、感賦一律、軍都關外黯魂銷、騰有桓碑伴沈寥、自是邊隅□□古、豈眞長吏果堪謠、彈琴峽在琴應碎、應夢山空夢欲飄、景物恍然如昨日、幾固翹首朔雲高」とあり、また、「方觀承過岔道鎮、爲勁草使君舊治、讀州人去恩碑、有廉明惠靜民、不能忘之語、用誌四韻、即寓頌德寄懷之意。看山一塵復看碑、大字丹題想績垂、舊守平生稱久故、居人十載繫謳思、兒童竹馬爭迎路、過客軸軒小駐時、爲栢使君清興在、重勞官職尚能詩」と、『松漠草』5の詩を引用する。
- *21 註10前掲、岡田著書、p.159に「十六世紀にトゥメト部のアルタン・ハーンが明から逃亡・投降してきた漢人を住まわせて都市をつくらせたことに始まり、内陸貿易の據點として繁榮した。歸化城の名は、アルタンが明と講和した際に明がつけたもので、モンゴル語名のフヘホト（ココ・ホトン）は「青い城」の意。清代も南モンゴルの政治・經濟・宗教の中心地として榮えた」とある。
- *22 『聖祖實錄』卷一百七十七、康熙三十五年十月丙申「是日上註蹕歸化城」、丁未「上由歸化城註蹕衣赫圖爾根郭爾之南」。
- *23 下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩譯註』三、講談社學術文庫、2016、は「内モンゴル自治区フフホト市の南、牧草が乾燥して白くなくても昭君の墳墓（盛り土をした墓）だけは青々としていた」（譯註執筆：小川恒男）とする。
- *24 37「從軍雜記一百首」第十七首末の割註による。なおこの割註には巢について、「作穴沙中嚙蒿壘穴口以蔽風雪、雪深埋草、又以充食。高長尺許、無一參差」とある。
- *25 同上。
- *26 『高宗實錄』卷之十五、乾隆元年三月乙卯、總理事務王大臣議覆、に「署寧遠大將軍查郎阿等奏、…又大兵全撤之後、應於馬蓮井子以東、星星峽以西、

分別安設馬塘。遞送文報。所有口外軍臺。即行全撤。均應如所奏」とある。

- *27 この字は現在鄯善縣（現在の新疆ウイグル自治區吐魯番市、光緒二十八年に縣となる）、宋代まで置かれた鄯州（現在の青海省西寧）に用いられる。
- *28 『世宗實錄』卷七十八、雍正七年二月癸巳。
- *29 『世宗實錄』卷七十九、雍正七年三月丙辰。
- *30 この過程を記した魏源『聖武記』卷三「雍正兩征厄魯特記」は「傅爾丹は勇にして寡謀なり」とする。
- *31 『世宗實錄』卷一百四、雍正九年三月癸未。
- *32 『世宗實錄』卷一百三、雍正九年二月戊午に、「諭。從來備辦軍需、於地方不無勞費。朕深知其弊。惟恐累及民間。是以於征勦準噶爾之舉、心密籌於數年之前、一絲一粟、皆用公帑。而民間竝不知國家將有軍旅之事。從來未聞預備軍需地方、能如此毫不騷擾者也。此天下所共知。更爲三秦百姓所深悉者、及至大兵既出、時日既多。輓粟飛芻、脂車秣馬、雖不取辦於民財、恐不免借資於民力。此亦事勢之不得不然。祇以準噶爾狡獪兇頑、父子濟惡、實蒙古之巨患、爲國家之隱憂。若因循苟且縱賊養姦、則狡寇一日不滅、邊境一日不寧、即內地之民、亦一日不得休息。此朕熟思詳審、至於再三而出於萬不容己者、竝非好大喜功、利其民人土地、而爲此舉也。即以上年之事言之、賊夷先遣使臣詐稱求和、及朕降旨、暫停進兵、而賊從乘我不備、大肆猖獗、然則此等狡寇、固可置之度外、聽其貽害於邊方哉。即此愈見聖祖皇考當年不得已之情。朕今日繼承先志、不能不辦理之苦衷也。惟是國家設兵所以衛民、今因用兵、而有不得不資民力之勢、朕心實爲憐憫。是以年來屢蠲陝甘二省額征錢糧、使羣黎均沾膏澤。而三秦紳士庶民、感激國恩、兼明大義、踴躍趨事、志切急公。二十年來如一日、朕實嘉之。如昨歲據督撫奏報、甘肅士民等、有願捐車輛以資輓運者、有願捐草束以供芻牧者、朕皆降旨、一一照數給與價值。而其服勞運力之誠悃、亦大可見矣。今年添辦軍需、朕又切諭督撫有司等、體恤民情。不得絲毫擾累、其糧餉運費特令加增。儻再有不敷、仍令據實陳奏、無非軫念民勞之意、惟陝甘二省紳士庶民等、歡欣鼓舞、勿懈初心、則和氣致祥、仰邀天眷、不數年間、必見膚功克奏、不但邊城內外、共享寧靜之福、即爾等世世子孫、永保安居之樂矣。查雍正九年、甘肅所屬額徵錢糧、業已全行蠲免。西安所屬額徵錢糧、前降旨蠲免四十萬兩、著再蠲免四十萬兩、以昭朕體恤之恩。該督撫務飭有司、敬謹奉行、使閭閻同受實惠、併將此旨刊刻頒布、俾陝甘二省、遠鄉僻壤之民共知之」とある。なお、雍正十一年四月初二日の兵部尚書署理陝西巡撫印務史貽直の奏摺には、「臣於前歲奉差到陝帶有宣諭化導人員、每次訪查各價、悉委該員等、分路前往。嗣經宣諭化導事竣之後、各員或令回京、或留陝甘二省分用。常年三月迄今、尚係留陝人員差辦訪查價值。今各員已陸續委用、所餘不過數人」とあり、宣諭化導の人員は諸物價の調査も行ってたこと、雍正十一年に至っても縮小はされていたが職務は繼續していたことがわかる。（『雍正朝漢文硃批奏摺』24、250頁）
- *33 『世宗實錄』卷一百十九、雍正十年閏五月辛卯。
- *34 『清史稿』卷四百八十五、列傳二百七十二、文苑二、

などによると、戴亨（1691-1762?）字通乾、號遂堂。戴梓の第三子。生後二ヶ月で父戴梓（原籍浙江省仁和县）の流刑に従い奉天に行き、奉天承德縣に隸籍する。康熙六十年進士。河間教授、山東省齊河縣知縣に任ずるも上官と衝突して罷官。その後は官職に就かず、詩作に専念した、李楷・陳景元とともに「遼東三老」と呼稱される。詩集に『慶芝堂詩集』（『遼海叢書』所収）がある。

- *35 『小方壺齋輿地叢鈔』所收文獻の問題点については、田野村忠温「言語研究資料としての近代中國地理文獻彙集の信頼性」『或問』36、2019、参照。なお、中央民族學院圖書館編『甘新遊踪彙編』（1980年刊）にこの『從軍雜記』が収められているが、その跋には『小方壺齋輿地叢鈔』から輯入したことは記されているのみで、『松漠草』への言及は無い、比較的近年の研究動向である馬大正「清至民國中國學者新疆考察史研究評述」『西域研究』2015年第4期、も同様である。
- *36 『高宗實錄』卷二、雍正十三年九月丙午。
- *37 『高宗實錄』卷六、雍正十三年十一月乙巳に、「命議敘平郡王軍功。諭總理事務王大臣曰、從前北路軍務傅爾丹錫保前後辦理錯誤、諸事廢弛、自平郡王爲大將軍以來、實心任事、整理一切、雖因賊寇斂跡、未著顯功、而在外統兵數年、實屬勤勞並無過失。皇考原欲俟其回京加恩、但未降旨。著照西路署大將軍查郎阿議敘之例、將平郡王議敘。以爲人臣殫心公事、宣力戎行者勸、諭國家久道化成人文蔚起皇考樂育羣材。特降諭旨」とある。
- *38 『欽定日下舊聞考』卷五十六、城市、外城東城、に「『原』[朱彝尊撰]夕照寺、其建置年月無碑記可考。或云燕京八景有金臺夕照、此寺之所由名也。析津日記。臣等謹按、夕照寺在育嬰堂東、創建年月無可考。趙吉士育嬰堂寺記云、夕照寺、順治初已圯、僅存置一楹、蓋其來久矣。今殿宇甚完整。又考燕京八景有金臺夕照、在朝陽門外。析津日記云、此寺以是得名、誤也」とあり、光緒『順天府志』卷十六、京師志十六寺觀一、外城寺觀に「夕照寺、在廣渠門內、育嬰堂東。寺莫詳所始、其建置年月、亦無碑記可考。謂燕京八景有金臺夕照、此寺之所由名也。趙吉士育嬰堂寺記云、夕照寺、順治初已圯、僅存置一楹、蓋其來久矣。今殿宇甚完整、殿壁上畫松可觀。五城寺院冊」とある。なお康熙『順天府志』には夕照寺の記載が無い。『豎步吟』57「遊萬柳堂有作」にある、康熙十年から二十一年まで文華殿大學士を任じた馮溥が建てた萬柳堂が附近に在る。
- *39 方求義は字は質夫、桐城の人、拔貢出身。乾隆『龍南縣志』卷十五、職官には雍正十三年任（おそらくは乾隆八年まで任）、とあり、詩題と符合する。光緒『上猶縣志』卷八、官師志によれば、乾隆十二年からおそらく十四年まで上猶知縣。『安徽通志』卷百四十三に、「字は綺亭、桐城拔貢生、龍南縣知縣をつとめ、安遠縣を攝す」とあり、飢饉の時にいち早く糶米を行い、他邑も例となした、とする。乾隆十三年の米貴への對應か。『豎步吟』30、『燕香集』下100にも登場するが、『燕香集』下100は、「綺亭兄」とする。『皖雅初集』卷五、に「方求義、字質夫、

- 號綺亭，晚號樂巢，桐城人。上元籍，拱乾玄孫。雍正貢生，乾隆時至江西龍南知縣。阮元江蘇詩事，綺亭大令，門亭太保從兄也。嘗客保定節署，語及江東詩人。綺亭抽出陳古漁詩，太保尤愛春草八首，讀至『失路可能無壯士，登樓何處不斜陽』二句，感傷往事，不覺泣下，遂具書延聘古漁，以母老不赴。論者兩賢之」とあり、『燕香集』下16, 17, 18, 20も「樂巢兄」とする。弟から兄への呼稱の變化が如何なる事情によるものか不詳。
- *40 『國朝御史題名』によれば雍正四年に刑部員外郎より貴州道御史巡察保正河に考選され、のちに浙江道巡察東城，工科給事中，刑科掌印給事中に轉ず。
- *41 袁枚「太子太保直隸總督方敏恪公神道碑」に「借居清涼山僧寺，有中州僧，知爲非常人，厚待之」とある。道光『上元縣志』卷十二，寺觀に「清涼寺在清涼山之陽」とあり，十國の吳の順義年間（921-927）に建てられた。乾隆十六年に乾隆帝の南巡の時に御書聯額を賜った。方觀承によりおそらく乾隆十五年九月に重修されている（道光『上元縣志』卷二，圖説による）。
- *42 朱彬『遊道堂集』卷一「方敏恪公軼事」。朱彬は寶應の人でもある。註2前掲，拙稿參照。
- *43 袁枚撰「太子太保直隸總督方敏恪公觀承神道碑」に「公弱冠歸金陵，家無一椽，借虛清涼山僧舍，中州僧知爲非常人，厚待之」とある。
- *44 『詞林輯略』卷三。
- *45 禪僧とつながりによる方觀承の任官後（特に直隸總督任官後）の具体的な政策の展開については，拙稿「乾隆期直隸省における貧民救済事業—方觀承撰『養局案記』を中心として—」『熊本大學教育學部紀要』69, 2020, 參照。
- *46 『詞科掌錄舉目』に「詹事府詹事管少詹事王奕清舉六人。內閣中書方觀承江南桐城人不考」とある。なお，王奕清は江南太倉の人。『清史稿』卷二百八十六，列傳七十三に「奕清，字幼芬。康熙三十年進士，選庶吉士。歷官詹事。代父赴軍，歷駐忒斯，阿達拖羅海。奕清體羸善病，處之晏然。雍正四年，命赴阿爾泰坐檣。又十年，乾隆元年，召還，仍以詹事管少詹事。乞假葬父，尋卒」とあり，康熙年間に康熙九年の進士で庶吉士から「禮の聖職者」のコースにより文淵閣大學士まで至った王揆の子。本人は康熙三十年の進士。庶吉士から詹事に至るが，康熙六十年父王揆が立儲を請うたことの責めを受け謫戍されようとしたが，年老により奕清が代わりに往くこととなる。その後雍正四年阿爾泰に往くことを命じられている。方觀承とはここで面識をもったのであろう。乾隆元年に召還され，詹事府少詹事に復職しており，その時方觀承を博學鴻詞に推薦したのである。
- *47 『述本堂詩集』の『東閩刺稿』の前，すなわち最初の方觀承の詩集の始まる箇所の陳兆崙の序に「乾隆元年舉行鴻詞科，海內徵士大集，閣中同牒舉者，推先生爲冠冕，廷試之日，平郡王監試，先生嘗爲平邱記室參軍事，引嫌不赴」とある。なお，ただ，福彭が博學鴻儒にどのような関わっていたかは檔案・實錄等の史料においては確認できない。陳兆崙（1700-1771）は錢塘の人。雍正八年進士。福建の即用の知縣（實授は無しか）から雍正十三年，博學鴻詞に推薦されて赴京，內閣中書を授けられる。方觀承とはその時に面識を得た。同年軍機章京。乾隆元年の博學鴻詞で二等，翰林院檢討となり，その後は「禮の聖職者」のコースを歩み，太常寺卿に至る。市瀨信子「周京と杭州詩壇」『中國中世文學研究』67, 2016, によれば，乾隆八年ごろ，杭州で顧之珽の「湖南詩社」に参加するなど詩壇でも活躍しており，この時期は方觀承が清河道や直隸按察使に任じている時期であるから，翰林官と實務官僚の職務内容の差異が明瞭である。
- *48 戴逸『乾隆帝及其時代』中國人民大學出版社，1992, 九。人物「曹雪芹與平郡王福彭」によれば，福彭は乾隆帝の即位以前から同學として相知っており，『樂善堂全集』の序文も撰しており，唯一の摯友であったとする。そして推論ではあるが，乾隆帝は康熙・雍正兩朝において宗室王公が權力を握り兄弟が相争ったことを教訓に，宗室親貴が執政するのを完全に排斥しようとし，福彭も總理事務處から軍機處再設置の際には中樞から排除され，厚遇は受けるも政界においては影をひそめることとなった，とする。福彭は乾隆十三年十一月十三日午時に病死，享年四十一。

（附記）本論は令和4年～7年度科學研究費補助研究，基盤研究（C）「18世紀末から19世紀初頭，清朝統治下の中國における公共政策の展開」の研究成果の一部である。